武蔵野日曜集会
主の有
――ロマ書第14章――

１９７８年12月10日（武蔵野）
小池辰雄

弱き者を容れよ　潔きもの、潔からざるもの　神の創造のものはすべてよし　廓然無聖　日日好日　南無キリスト　生くるも死ぬるも我らは主の有　聖霊の中での歓喜　図太い信仰

【ロマ14・1～23】

1 なんじら信仰の弱き者を容れよ、その思うところを詰るな。2 或人は凡ての物を食うを可しと信じ、弱き人はただ野菜を食う。3 食う者は食わぬ者を蔑すべからず、食わぬ者は食う者を審くべかず、神は彼を容れ給えばなり。4 なんじ如何なる者なれば、他人の僕を審くか、彼が立つも倒るるも其の主人に由れり。彼は必ず立てられん、主は能く之を立たせ給うべし。5 或人は此の日を彼の日に勝ると思い、或人は凡ての日を等しとおもう、各人おのが心の中に確く定むべし。6 日を重んずる者は主のために之を重んず。食う者は主のために食う、これ神に感謝すればなり。食わぬ者も主のために食わず、かつ神に感謝するなり。7 我等のうち己のために生ける者なく、己のために死ぬる者なし。8 われら生くるも主のために生き、死ぬるも主のために死ぬ。然れば生くるも死ぬるも我らは主の有なり。9 それキリストの死にて復生き給いしは、死にたる者と生ける者との主とならん為なり。10 なんじ何ぞその兄弟を審くか、汝なんぞ其の兄弟を蔑するか、我等はみな神の審判の座の前に立つべし。11 録して『主いい給う、我は生くるなり、凡ての膝は、わが前に屈み、凡ての舌は、神を讃称えん』とあり。12 我等おのおの神のまえに己の事を陳ぶべし。

13 然れば今より後、われら互いに審くべからず、寧ろ兄弟のまえに妨碍または躓物を置かぬように心を決めよ。14 われ如何なる物も自ら潔からぬ事きを主イエスに在りて知り、かつ確く信ず。ただ潔からずと思う人にのみ潔からぬなり。15 もし食物によりて兄弟を憂いしめば、汝は愛によりて歩まざるなり、キリストの代りて死に給いし人を汝の食物によりて亡ぼすな。16 汝らの善きことの誹られぬように為よ。17 それ神の国は飲食にあらず、義と平和と聖霊による歓喜とに在るなり。18 斯してキリストに事うる者は神に悦ば

れ、人々に善しと為らるるなり。19然れば我らの平和のことと互いに徳を建つる事とを追い求むべし。20なんじ食物のために神の御業を毀つな。凡ての物は潔し、されど之を食いて人を躓かする者には悪とならん。21肉を食わず、葡萄酒を飲まず、その他なんじの兄弟を躓かする事をせぬは善し。22なんじの有てる信仰を己みずから神の前に保て。善しとする所につきて自ら咎めなき者は幸福なり。23疑いつつ食う者は罪せらる。これ信仰によらぬ故なり、凡て信仰によらぬ事は罪なり。

●弱き者を容れよ

1なんじら信仰の弱き者を容れよ、その思うところを詰るな。

パウロという人は非常にいろいろ思いやりのある人で、決していわゆる極端ではない。極端というなら、もの凄い極端なものを持っていますけれども。福音の構造というものは、何といいますかね、本当に大自然みたいなようなものです。もの凄い嵐かと思うと、もう本当に無風になったり。福音というものは絶対に主義や思想とかイズムとか、そういったものに限定されることができない。限定すればするほど福音から外れる。

「信仰の弱き」と、分かりやすく言っているわけです。いろいろ段階がありますから。私も自分の過去を顧みてみると、いろいろ段階があったわけです。

2或人は凡ての物を食うを可しと信じ、弱き人はただ野菜を食う。

肉食はいかんと思っていると。日本人は、どちらかというと、菜食の方でね、ヨーロッパ人は肉食。砂漠の民もそうです。同じお酒でも、葡萄酒とまたお米のお酒とはちがう。

3食う者は食わぬ者を蔑すべからず、食わぬ者は食う者を審くべかず、神は彼を容れ給えばなり。4なんじ如何なる者なれば、他人の僕を審くか、彼が立つも倒るるも其の主人に由れり。

この場合、深い意味では、「主人」はもちろんキリストの意味です。

彼は必ず立てられん、主は能く之を立たせ給うべし。5或人は此の日を彼の日に勝ると思い、或人は凡ての日を等しとおもう、各人おのが心の中に確く定むべし。6日を重んずる者は主のために之を重んず。食う者は主のために食う、これ神に感謝すればなり。食わぬ者も主のために食わず、かつ神に感謝するなり。7我等のうち己のために生ける者なく、己のために死ぬる者なし。

パウロが妙なことを言い出しているんですが。食物のことや日のことだの。これはユダヤ人は非常にその差別をしていたわけです。

●潔きもの、潔からざるもの

レビ記の11章を見てください。ここに食物のことが書いてある。「潔きもの、潔からざる

もの」とか言って、それで「食べるの、食べないの」と騒いでいる。

「1エホバ、モーセとアロンに告げてこれに言い給わく。2**イスラエルの子孫に告げて言え。地の諸の獣畜の中汝らが食うべき四足は是なり。3凡て獣畜の中蹄の分たる者すなわち蹄の全く分たる反芻者は汝等これ食うべし。**

反芻類だね。

4**但し反芻者と蹄の分たる者の中汝等食うべからざる者は是なり。**

なかなか詳しいんです。

即ち駱駝是は反芻ども蹄わかれざれば汝等には汚れたる者なり。

そういうことを言っているんだからね、ラクダの肉は食うなと。

5**山鼠是は反芻ども蹄わかれざれば汝等には汚れたる者なり。**

なんでこんなことを言い出すかと思うですね。

6**兎是は反芻ども蹄わかれざれば汝等には汚れたる者なり。7猪是は蹄あい分かれ蹄まったく分かるれども反芻ことをせざれば汝等には汚れたる者なり。8汝等是等の者の肉を食うべからずまたその死体にさわるべからず是等は汝等には汚れたる者なり。**

今度は魚の方だ。

9**水にある諸の中汝等の食うべき者は是なり。凡て水の中におり海河に居る者にして翅と鱗のある者は汝等これを食うべし。**

鯉みたいのはいいんだ。鰻はだめだ。みんな鰻は食えなくなるよ、ユダヤ人だと。

10**凡て水に動く者凡て水に生きる者即ち凡て海河にある者にしてなかなか言い方がくどいんだよな。翅と鱗なき者は**

海蛇なんかは絶対にいかん。

是汝等には忌まわしき者なり。11是等は汝等には忌まわしき者なり、汝等その肉を食うべからず、またその死体をば忌まわしき者となすべし。12凡て水にありて翅も鱗もなき者は汝等には忌まわしき者たるべし。

そういうものは食べてはいかんと。

今度は空だ。

13**鳥の中に汝等が忌まわしとすべき者は是なり。是をば食うべからず、是は忌まわしき者なり。即ち鷲、熊鷹、鳶、**

猛禽だね、これ。

14**隼、鷹の類、15諸の鴉の類、16駝鳥、梟、鴎、雀鷹の類、17鸛、鵜、鷺、18白鳥、おすめどり、大鷹、19鶴、鸚鵡の類、鳴および蝙蝠。**

まぁ大変だよな。

20また凡て羽翼のありて四爬にあるくところの昆蟲は汝等には忌まわしき者なり。21但し羽翼のありて四爬にあるく諸の昆蟲の中その足に飛腿のありて地に飛ぶものは汝等これを食うことを得べし。22即ちその中、蝗虫の類、大蝗の類、小蝗の類、はたはたの類を汝等食うことを得べし。23凡て羽翼のありて四爬にあるくところの昆蟲はみな汝等には忌まわしき者たるなり。云々」（レビ11・1～23）

と。まぁ、そんなことで、今度は、「地のはうもの」というのが29節から書いてありますから。イタチだの、ネズミだの、大トカゲ、イモリ、ヤモリだのと。

「29地に匍うところの匍行者の中汝等に汚穢となる者は是なり」

と言って、いろいろ分けているわけです。ユダヤ人はこれを守っているんだ、今でも。「モーゼの五書」というわけで。だから、ユダヤ人と一緒に豚なんか食えない。鰻なんかも。

●神の創造のものはすべてよし

パウロは、「どれを食うの食わないのと言って、お互いに言い合っているが、どっちもそうやって審くものではない」と。食べても食べなくてもいいが、要するにそれは、主のために、信仰にあって――これは14章の一番終りに書いてあるんです。

「23……凡て信仰によらぬ事は罪なり。」

と。何をするのでも、それが本当に信仰によっているのならいいんだけれども、よってないのは罪だと。パウロはもちろん、パウロもペテロも、どれが潔いの潔くないのなんて、そんな区別はしない。

「神さまの造ったものはみんな潔い」

とキリストは言われたですから。ペテロが区別をした時に幻のうちで、「そんな区別をしてはいかん」とキリストにやられたでしょ。だから、キリストはユダヤ教的なこういう区別は全部のりこえてしまって、

「神の創造のものはすべてこれよし」

という。いわゆる相対的に潔いの潔くないのというようなことはダメだ。問題は、本当に信仰にあってやるかということ。そうしたら、食べても食べなくても、そんなことはどうでもいいと。

「割礼を受けるも受けないも、信仰だけだ」

とパウロが別なところで、割礼問題でも言っているでしょ。そういうように突き抜けなくてはいかん。

●廓然無聖

それで思い出すのは、碧眼録の第一則です。「聖諦第一義」というところをご紹介してお

きましょうね。梁の武帝は非常に仏教に熱心な王さまで、寺院を建てたり、いろいろ仏事をやったりして熱心なんだ。それで、達磨さんを招いたわけだ。天竺からはるばる三年かかって達磨がやって来た。

「達磨太子に問う、いかにかこれ聖諦第一義。

「聖諦」というのは仏道の奥義のことです。仏道の奥義の第一義は何だと。

磨言う、廓然無聖。

この「廓然無聖」という言葉は覚えておきなさい。「廓」というのは広大無辺なことです。広大無辺で聖が無い。別に聖くないと答えたわけです。そうすると、武帝は何のことか分からない。第一の聖諦であるのに、廓然無聖だと言う。聖を否定するようなことを言った。

帝曰く、朕に対するのは誰か。

私に対して今語っているのは誰かと。

磨曰く、不識。」

識らないと。「語っているのは誰か」と聞かれたら、達磨は「不識」、「識らない」と言った。それで、話にならない。達磨があきらめてしまって、また揚子江を渡って、魏の方に行って、少林寺で面壁九年を始めるわけだ。そして、いわゆる第二祖が、青年がやって来て、有名な慧可断臂の話が出てくるわけですが。

「廓然無聖」というのは、聖いの聖くないのと、そんな意識も既に超えていることなんだ、無聖というのは。聖が無いというのではなくて、聖いだの汚れだの、そういうことをまだ区別しているうちはダメだ。聖の中にいながら、もう聖を乗り越えて、聖を意識しない世界が本当の聖だと。無聖の聖ということだ、もし聖ということを言いたければ。無聖の聖。聖無き聖。

クリスチャンが自分のことを「聖徒」だなんて意識したらお終いなんだ、本当は。そして、人の品定めをやっている。だから、私は「無」と言っている。何者ともしないということ。この無聖の世界なんです、私がキリストを「無者」と言っているのは。もう絶対に私は第三巻(『無の神学』)で書くから。

食べ物が聖いの聖くないのなんて、本当はこんな話はてんで問題にならない。もし言うならば、心根のはなしだ。人に策略を用いたり、偽ってみたり、そういうような心の世界のものですから。その心の世界の聖すらも、もはや意識しない。無聖と言った。

だから、「対している者は誰か」と言ったが、自分は達磨であることも意識してないことが「不識」ということなんです、「識らず」と言ったのは。「私は達磨でも何でもない」と。「何者でもない」ということなんです、この「不識」とは。「識らないよ」と言って、ただひねくれて言っているのではない。即ち、もう自分を何者ともしない。ただ主のみ、ただ神のみ、ただ仏のみという。その角度がこの不識なんです。

あなた方は無の世界がもの凄いということが少しずつ分かってきたでしょ。普通言って

いる虚無だとか、有と無とかいう相対的意識ではないということ。これが「聖諦第一義」ということ。聖諦の根本義は結局、煮詰めれば無なんです。無聖なんです。だから、親鸞も言ったでしょ、

「自分は聖者でもなければ凡人でもない」

と。聖・凡というようなことをまだ意識している世界は本当じゃないということです。だから、私は「聖会」なんていう言い方は嫌いなんだよ。「聖なる会」なんて、人間の相対的な在り方を「聖会」なんて言ってしまうのは、それは言い過ぎです。本当は無会と言いたいくらいだ。キリストはそのようにして「神のみ」と、キリストは自分をも本当に意識しないで、不識の世界にキリストは事実入っていらっしゃる。

「なんぞ、我を善しと言うか」

と。

●日日好日

ここに食物のことで潔いの潔くないのなんて騒いでいるが、何を言っているかとパウロは言うわけだ。お互いに相対的なところでもって判断して言っているなと。

日のこともそうです。だから、「日々是好日（にちにちこれこうじつ）」という。あれは素晴らしい言葉です。どの日もいいんだと。福音の世界に入ると、みんなこういう言葉が本当に生きてくるんです。我々が今つかまされている福音の世界に入ってくると。どうですか、廓然無聖の気持ちになったですか。本当に楽だから。

そういう、「日々好日」、よからざるなし。雨が降れば雨で結構だと。風が吹けば風で結構だ。曇れば曇りで結構だ。晴れれば晴れで結構だと。その中に自分が本当に溶け入ってしまっている。大自然の如しというのは、「如し」というのはそこに即しなければダメだ。即自然でなければ。即自然の世界は極まると、いつか言った霊然の世界になる。霊の法則あり、道徳の法則あり、物理の法則あり。みんな法の世界。法に即することが即ち自然であり、それが自由である。必然も自由も同じこと。カントは「普遍妥当」と言うけれども、あれはある意味における真理ですけれども、現実の法則の世界はいわゆる普遍妥当ではない。それぞれみなその時その時の特殊な在り方において法が働くから、姿は違うんです。そういうのが「日々好日」。

ローマ書14章のところで、廓然無聖なんか持ってくる註解者なんかいやしませんよ。ただ問題は、本当に「主にあって」食べるかということ。「主のために」よりも「主にあって」です――「主は、主の、主に、主を」という「てにをは」だ――全部、主が主体なんです。今日の題は「主の有（もの）」という。これはギリシア語で二格が使ってある。「トゥー　キュリウー」という。

私はここであまりギリシア語なんて言いたくないんだ、本当は。ドイツの一流の註解書

の「ＮＴＤ」も、「ＡＴＤ」も、一流の註解書ですよ、みんなドイツ語で書いてある。ギリシア語もヘブライ語もひとつも出てこない。私はああいうのは好きだね。そういう、もう溶けてしまっている世界は、何語だなんてあまり区別したくないんだ、私は。

「主は、主の、主に、主を」と。要するに「主」が主体になっている。「主のために」という、その「主のために」も、「主は、主の、主に、主を」も全部、

「エン・クリスト」「キリストの中に」

という、「の中」に入っていると、この「主は、主の、主に、主を」が本当に掴めてくる。それでないと、「主はわが救い」なんて言ったって、中に入っていなければ、本当は「主は」なんて言ったってダメなんです。

●南無キリスト

[6]…食わぬ者も主のために食わず、

「主のために」とは、ギリシア語でいうと、三格が使ってある。「主に」という言い方になる。

かつ神に感謝するなり。[7]我等のうち己のために生ける者なく、己のために死ぬる者なし。

直訳すると、

「主に生き、死ぬるも主に死ぬ」

だね。「ために」というと、なにかちょっと距離ができてしまう。「ために」なんていう前置詞はなにもない。だから、「は、の、に、を」でも、全部これは即してなければダメです、距離があっては。即の世界。即の世界が本ものであるためには、中に入ってなければダメなんです。「中」。「中即」なんていう字はないけれども。普通は「即如」という。

「主の中で死に、主の中で生きる」

んだよ。主に生き、主に死ぬ。だから、生くるも死ぬるも、それはもういわゆる相対的な死生を超えているんです、そこへ来ると。相対的な死生を超えている。主に生き、主に死ぬ者は永遠に生きている。絶対、主を死んでいるから、絶対、生であるわけです。十字架において絶対、主を死んでいるんだから、我々は。だから、絶対、生に生きている。相対的人間にはいろいろなあれはありますよ。ありますけれども、信の世界では、信の現実では、信という現(うつつ)の世界では、もう絶対に死んで、絶対に生きている。それはパウロが言っているとおり、

「われキリストと共に十字架せられたり。もはや生くるにあらず。キリストわがうちに在りて生き給うなり」

と。これはパウロの一番の根源の現実、根源現実です。相対的現実のパウロもいるよ、それは。

「ああ、われ悩める人なるかな」

なんていう。死に到るまでみな罪びとにすぎない。けれども、もうひとつ奥ではもうハッキリと救われている。

だから、もの凄いんです。これは誰でもが受けとれる世界なんです、誰でもが無条件に。

「なかなかそこまで行きません」

ではないですよ。無条件です。いつも言っているとおり、一番素晴らしい世界は誰でもが無条件に――空気は無条件に吸っているように――キリストの中には誰でもが無条件に入れる。みんな、無条件を一生懸命で条件付けているんだから、ご苦労さんな話だ。

これが「南無」の世界です。祈り入る世界。

「南無キリスト」

の世界です。祈入（帰入）しているわけだ。祈入（帰入）が即ち、中の世界。の、中の世界。祈り入らなかったら、「の中」なんて言ったって、それは観念です、思われているだけです。全身を投ずることです、祈り入るとは。祈りとはお願いにあらず、己を投ずることなりということ。

この頃の集会は、あなた方と本当にピタリなんで、主に在っての深い愛の交わりは、私は無条件に信じています。まぁ、私は本当のことを言っていれば、だんだんあなた方がそれを身をもって証してくださることになると思っています。その点では、是非とも私は第十巻（『聖書は大ドラマである』1988年刊）を書き上げたいですから、ご協力をお願いします。

●生くるも死ぬるも我らは主の有

8 われら生くるも主のために生き、死ぬるも主のために死ぬ。然れば生くるも死ぬるも我らは主の有（もの）なり。

「主の有（もの）なり」の「もの」なんていう字はない。「主の」なんです。属格、第二格です。こういうところは非常に強いね。この8節は極めて大事な節です。聖書の中の一番大事な言葉の一つ。「我らは生くるも主に生き」と。「主のために」なんて言わないでくださいよ。「ために」と言うとね、なにか偉そうだよ。こっちが主のために何かするような。「主のために」じゃないよ、「主に生きる」んだ。この「ために」は取った方がいい。

「我らは生くるも主に生き、死ぬるも主に死ぬ」

と。「主のために死にました」なんて偉そうなことを言ったら、冗談じゃない。「主にあって」という――「エン」という字はないが――いきなり三格が使ってある。

9 それキリストの死にて復（また）生き給いしは、死にたる者と生ける者との主とならん為なり。

「主となればなり」ということだ。8節、9節は大事なところです。「主であらんため」の「あらんため」という字はギリシア語でいうと、たった一字です。「キュリエッセー」という。「キュリオス」という動詞をそういった目的的に使った使い方です。そんなギリシア語なんて

分からなくたって、あなた方は霊で読めばこんなのは読めてしまうんだ。まぁ、若い人はギリシア語でも勉強してください。でも、ギリシア語が鼻についたらダメだよ。

10 **なんじ何ぞその兄弟を審くか、汝なんぞ其の兄弟を蔑するか、我等はみな神の審判の座の前に立つべし。**

「立つべし」は「立つべければり」と。もう、人を審くような気持ちはなくなってしまうよ、「審くな」なんてパウロが言ったって。バカらしいから、もっと次元が高いから。

11 **録して『主いい給う、我は生くるなり、凡ての膝は、わが前に屈み、凡ての舌は、神を讃称えん』とあり。**

イザヤ書45章の言葉。イザヤ書や詩篇だのがよく出てくるよな。

12 **我等おのおの神のまえに己の事を陳ぶべし。**

陳ぶることになるぞ、という。

13 **然れば今より後、われら互いに審くべからず、寧ろ兄弟のまえに妨碍または躓物を置かぬように心を決めよ。**

相手を躓かせないようにしなさいよと。いろいろ次元があるからね。

14 **われ如何なる物も自ら潔からぬ事なきを主イエスに在りて知り、はいその通り。すべてのものは結構なものだと。神さまの造ったものはみんな潔い。結構なんだと。まぁ、「潔い」なんていう言葉は使わなくたっていいんだよ。すべて結構だと。「潔い」なんて言うと、「それでは、汚れたものは何だ」なんていうことになる。**

女の人の血のことを汚れたものなんて旧約には書いてあるけれども、そんなことはなにもない。血は生命のあるところですから。血を飲んではいけないと書いてある。また、殺人は一番悪いことだ。血を流すから。その相対的な殺人の血を贖罪の血として実証したのがキリストの十字架だ。

かつ確く信ず。ただ潔からずと思う人にのみ潔からぬなり。

「神さまは、よこしまなる人にはよこしまとなり、頑なる人には頑なになる」なんていう言葉が旧約の中にあるね。そういうことになってしまう。自分で結局、そう思う人は、その人の心がそうだから。まぁ、すべての問題は結局、心と魂の問題になってくるんです。

●聖霊の中での歓喜

15 **もし食物によりて兄弟を憂いしめば、汝は愛によりて歩まざるなり、**

これとちょっと似たようなことがコリント前書8章に書いてある。

「7 **然れど人みな此の知識あるにあらず、**

「すべて神さまからやってきている」と前に書いてあるんだね。

或人は今もなお偶像に慣れ、偶像の献物として食する故に、その良心、弱く

して汚さるるなり。8我らを神の前に立たしむるものは食物にあらず。されば食するも益なく、食せざるも損なし。

食だの不食だの、そんなことが問題じゃないと。

9然れど心して有てる此の自由を弱き者の躓物(つまずき)とすな。

そんなことを問題にしている者を、あまりそれを言わなくていいからと。

10人もし知識ある汝が偶像の宮にて食事するを見んに、その人弱きときは良心そそのかされて偶像の献物を食せざらんや。

しょうがないよ、と言うんだ。

11然らばキリストの代りて死に給いし弱き兄弟は、汝の知識によりて亡ぶべし。

愛なき信仰の、そういったような知識によって亡びてしまうと。

12斯のごとく汝ら兄弟に対して罪を犯し、その弱き良心を傷めしむるは、キリストに対して罪を犯すなり。13この故に、もし食物わが兄弟を躓かせんには、兄弟を躓かせぬ為に、我は何時(いつ)までも肉を食(くら)わじ。」（コリント前8・7～13）

なかなか、パウロという人はそういうところをちゃんと加減をもって言っているわけだ。けれども、問題は、そういうことを問題にしないで、もうひとつ奥の世界を本当につかませてやれば、自然にそんなことは消えていくぞ、というわけだね。

キリストの代りて死に給いし人を汝の食物によりて亡ぼすな。16汝らの善きことの誹(そし)られぬように為(せ)よ。

「善きこと」というのは、今、コリントで読んだように信仰の自由です。

17それ神の国は飲食にあらず、義と平和と聖霊による歓喜(よろこび)とに在るなり。

17節は大事な節だね。神の国は聖霊に在るところの歓喜の世界だと。義と平安――平和ではない――と聖霊によるところの歓喜にあると。「聖霊による」というのはギリシア語では「聖霊に在っての」です。これはやっぱり、「エン」「の中」です。聖霊の中での歓喜。だから、御霊を本当に受けると、なにかうれしくてしょうがない。なにしろ、歓喜が溢れてくる。これは事実だからしょうがないね。

神の支配したもうところ、神の御意の行われるところ、それが神の国です。神の愛の動いているところ、それが神の国。「国」という字は「支配する」という意味だけれども、何が支配しているかというと、神の愛が支配しているんだよな。なにか権威でおっかなく支配しているのではない。

それは、「飲食にあらず」と。「この食べ物が潔いの潔くないの」と、そんなくだらないことを言っている世界ではないと。それが「飲食にあらず」ということです。「どういうものを食べていいの、悪いの」ということではない。

しかしね、今は文明というのが行き過ぎてしまって、どんな季節でも何でも食べれるよ

うになっているでしょ。とんでもないですよ、これは。身体によくない。季節のものが一番身体に合うようにできているんだ、神さまの法則の世界は。どうして、こういうことになってしまったかね。季節のものが一番です。

どうぞ、皆さんは正に法に即して動いてください。物理法則、道徳法則、宗教的霊的法則に。それが、即することが本当の自由だということ。

聖霊による歓喜、聖霊に在っての歓喜に在るなり。御霊の在るところに神の国あり。至るところこれ神の国なりと。ノバーリスの非常にいい讃美歌がある。

18斯(かく)してキリストに事(つか)うる者は神に悦ばれ、人々に善しと為(せ)らるるなり。19然れば我らの平和のことと互いに徳を建つる事とを追い求むべし。

「互いに徳を建つる事」は、「徳」という訳は「徳」なんだが――「オイコドメノス」という字はドイツ語でいうと「ビルドゥング」「教養」というが――道徳と人間性との両方が渾然としたような世界だな、「教養」というのは。ただ、「道徳、道徳」といってギシギシしているのではなく、そこに人間性がある。思いやりがある。思いやりのないのは、

「惻隠(そくいん)の心なきは人にあらざるなり」

と言う。孟子のああいう四つの言葉は、孔子や孟子の言葉をもういっぺん読み直すといい、福音の角度から。味があるから。どうして、今の人たちは古典を棄ててしまったのだろうかね。あなた方若い人の中でもう大事なんですよ、古典は本当に。読み直してください。

今の若い人たちの一般の意識というのは、間違った民主主義でもってワッショイワッショイやっているから、もうしょうがないよ。すぐストライキをやったり。やはり何といっても本当の信愛関係なんです。学校ですらなにか労使関係みたいな意識の組合がたくさんある。なにかすると、賃金のことばっかり考えている。

●図太い信仰

20なんじ食物のために神の御業(みわざ)を毀(こぼ)つな。凡ての物は潔し、されど之を食い(くら)て人を躓かする者には悪となるらん。21肉を食わず、葡萄酒を飲まず、その他なんじの兄弟を躓かする事をせぬは善し。

肉を食べたって、葡萄酒を飲んだっていいよ。しかし、相手が躓くときは、食べないでおいてやりなさいと、こういうことです。ところが、無教会は禁酒禁煙でもって、これが一種の律法になってしまっているものだから、お酒なんか飲む者を審いたりする。私は飲んでも飲まなくてもどっちでもいい。お相手するときは飲むよ。酔わないよ、私は。強いよ、案外。

22なんじの有(も)てる信仰を己みずから神の前に保て。善しとする所につきて自ら咎(とが)めなき者は幸福(さいわい)なり。23疑いつつ食う者は罪せらる。これ信仰によらぬ故なり、凡て信仰によらぬ事は罪なり。

これは大事なことです。何でも疑いつつやるものは、食うばかりでなくて何をするのでも、疑いの気持ちではダメだと。

祈りだってそうですよ。「これは聞かれるだろうか？」なんていって祈ったってダメだよ、それは。もうハッキリ、

「祈りたることは聞かれたりとせよ」

と。しかし、「聞かれた」というのは、祈った通りに聞かれているかは、それは別問題だよ。神さまの方の聞き方はちがうんだから。それを、その通りに聞かれないものを、「聞かれない」なんて思うことがそもそもまちがっている。どう祈ろうが、神さまの聞き方は自分の祈り以上の聞き方であるということを信じこんでいかなければダメなんです。でないと、現象にとらわれる。聞かれざる祈りはないんです。聖霊の執り成しは、その祈りをどのように執り成し給うかは向こう側のはなしだ。地上で祈りが聞かれなくたっていいんだよ、我々の悲願は。死んでから、その悲願はもっとすごい意味で聞かれるだろう。もう、その最大のものはキリスト自身です。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

と。もう絶対孤独の死ですよ、あれは。ところが、このキリストの福音は地の果てまでも世の末までも続くではないですか。十字架上のキリストの悲劇的な祈りは最もすごいことになっている。神さまはちゃんともう無限大にお聞きになっている。

いいですか。それだけの図太い信仰になってくださいよ。そういうのがこの、

「キリストに在ってせざることはすべて罪である」

という意味です。「信仰によりて」というのは、「キリストに在って」ということ。「エン・クリスト」「キリストの中に」に帰する。

「廓然無聖」の境地に入らないと。福音の世界に入ると、こういう言葉が本当につかめるんです、それは仏教徒よりか。だから、普通のキリスト教ではダメだよと言っている。